

長江家旧蔵資料の紹介（1）

—— 絵画・書 ——

佐藤弘隆(愛知大学地域政策学部)

E-mail hrtk31@vega.aichi-u.ac.jp

1. 長江家旧蔵資料

長江家住宅は、京都市下京区新町通仏光寺上る船鉾町に位置し、北棟(間口 3 間), と南棟(間口 4 間)の2つの主屋とその他の付属建物からなる大規模京町家である。長江家は、代々白生地卸を家業とし、屋号を大坂屋といった。1822(文政 5)年、3 代目当主の大坂屋伊助が現在の北棟の範囲に屋敷を取得した。当初の建物は、1864(元治元)年の大火で焼失しているが、1868(慶応 4)年には再建され、明治後期には南棟部分が買い足されて現在の規模となっている。

平成に入り、8 代目当主の治男氏が家を継ぐと、普段の生活を北棟で送り、南棟を仕事場とすることで、職住一体の暮らしを維持してきた。2005 年には京都市の有形文化財に指定され、京町家催事会場「袋屋」としての活用も始められた。

2012 年、治男氏は次の世代へ長江家住宅を継承する準備として、立命館大学アート・リサーチセンターに所蔵品の悉皆調査を依頼した。そして、建物の継承方法を模索していた治男氏は、京都での事業展開や社会貢献の拠点とする京町家を探していた(株)フージャースホールディングスと出会った。アート・リサーチセンターや京都市なども交えて、治男氏とフージャースとの間で慎重な話し合いが重ねられ、2015 年 5 月に建物の譲渡に至った。

この時、フージャースと立命館大学は長江家住宅の保全と活用について連携・協力することを目的に覚書を締結した。この覚書では、民間事業者と教育・研究機関である大学が連携し、それを行政がサポートするという、画期的な継承体制が示された。¹⁾ 具体的には、アート・リサーチセンターが長江家より収蔵品の寄贈を受けたが、寄贈品はこれまで通り長江家住宅の土蔵等で保管され、アート・リサーチセンターの管理のもとフージャースと協力し、四季折々のしつらいや特別公開での展示などに活用していった。

当初寄贈を受けた長江家旧蔵資料は、調度品や日用品、文書などの約 1000 点と写真資料約 2000 点にも及ぶ。現在でも、土蔵や物置の整理で新たに発見された資料や、追加寄贈分などがあり、その点数は日々増えており、正確な点数は把握しきれていない。

調度品と日用品は、管理番号と簡易的な照合写真、治男氏へのヒアリング内容などを収録した非公開のデータベースで管理している。²⁾ そして、特に重要な絵画資料や文書資料、写真資料などについては、本格的なデジタル・アーカイブを順次進めており、作業が完了したのから文化資源ポータルデータベースに登録し、公開している。本稿では、文化資源ポータルデータベースで公開している絵画及び書を紹介する。

2. 絵画・書資料の概要

絵画及び書は、掛軸として仕立てられたものが 81 点と最も多い。幕末から近代の京都画壇の作品が目立ち、主なものとして、近代京都画壇を開拓した幸野楳嶺に学んだ菊池芳文の『柳に蝙蝠』(ngec-029)・『鴨之図』(ngec-003) や、その弟子の山田耕雲の『新春』(ngec-039)・『菊慈童』(ngec-021: 図 1)、油小路錦の友禅職人の家の生まれで、文化勲章を受章した山口華楊の『牡丹』(ngec-002) など、四季や年中行事の床の間を飾るための作品が数多く挙げられる。

ちなみに、番頭机と一緒に常設展示している「住所録(名刺入れ)」には、山口華楊本人(京都市油小路三条上る)と父・安之助(京都市小川通三条上る)、兄・玲熙(京都市衣笠園)の名前がある。これから、長江家と山口家との間に何らかの付き合いがうかがえ、華陽が作品を贈ることもあったのだろう。

次は扁額が多く、20 点を数える。尊王派の活動家で、維新後に石巻県知事や私塾「立命館」の教員を務めた山中清逸の筆による『保壽』(ngec3-19)は縁起の良い言葉が力強く書かれており、オクの仏間の上に好まれて飾られていた。また、菊池芳文が牡丹を描き、その一門である田畑秋濤と山田耕雲、菊池契月が、白菊と朝顔と蝶、紫陽花をそれぞれ担当した『寄せ描き』(ngec3-06)は貴重な作品だ。

屏風は 13 点ある。岸駒に師事し、岸派を継いだ岸連山による『琴棋書画之図』(ngec3-002)は、六曲一対の大屏風であり、右隻には琴や棋に興じる高士、左隻には書や画を披露する高士が、美しい山水の風景の中に描かれる。四条派の松村景文に学んだ長谷川玉峰による『嵐山之図』(ngec3-008)は、六曲一隻の中屏風で、保津川に筏を流す新緑の嵐山の景観を描いている。明治、大正にかけての京都画壇の大家として知られ、力強い筆遣い

で個性的な作風を作り上げた鈴木松年による『角力書画』は、二曲の屏風で、片面に取り組みを行う力士2人を描き、もう片面に「負けてこそ勝手覚ゆる角力かな」と詩が詠まれている。

その他16点は、短冊や扇子、色紙、巻物などがある。そのなかでも大正10年(1921)に、岡本一平や近藤浩一路など、東京漫画会による制作で、中央美術協会から全国頒布された『東海道五十三次漫画絵巻』は、とりわけ面白い。漫画家たちは7日間の東海道自動車旅行を実施し、取材で得られた大正時代の各宿場の情景を肉筆の水彩画で生き生きと描いている。



図1 山田耕雲『菊慈童』(ngec-021)
本作品は、9月9日の重陽の節句の際に床の間に掛ける。

3. 山田耕雲と船鉾町・長江家

長江家旧蔵の絵画作品のうち、最も多くの作品を残しているのは山田耕雲である。耕雲は、1878年に錦小路通新町西入ル南入ルの炭之座町で、染色補正業を生業とする桔便屋傳兵衛の次男として生まれた。13歳の時、菊池芳文への入門により、早速才覚が表れ、京都市工業物産会に出品した作品が褒状を授かった。その後も耕雲は、新古美術品展や文展、帝展などに精力的に出品し続け、数々の受賞を得た。³⁾

30代の頃、山田耕雲は長江家と同じ船鉾町に借家人として住んでいた。祇園祭に出される船鉾の『寄進帳』(公益財団法人祇園祭船鉾保存会所蔵)にも、彼の名前が見

え、明治41年から大正4年まで毎年の寄進の記録が残っている。また、町内で揃えた船鉾の扇子にも、耕雲によって提供された絵が使われており、飛龍を描いたものと鶴を描いたものの2種類がある。

船鉾町で暮らした期間、耕雲は長江伊三郎(6代目)と親しく交流していたと見られ、長江家には本人から贈られたとみられる作品が数多く所蔵された。一部の作品は、立命館大学に寄贈されなかったものもあるが、先に挙げた作品の他に『梅に雀』(ngec2-005)や『葦に鷺』(ngcR5-007)の掛軸、『酔李白図』(ngc3-039)扁額などがある。また、同町で現在も呉服業を営む別の京町家にも、耕雲の屏風が残されており、町内の旦那衆が彼の創作活動を支え、応援していたことを物語っている。

4. 産学連携による活用

長江家住宅には、床の間が6箇所ある。現在も、アート・リサーチセンターとフージャースが連携して、季節や場面に応じて、それぞれの床の間にあったサイズの掛け軸を選び、定期的に掛け替え作業を行っている。

例えば、明治・大正時代の歌人で、御歌所寄人を務めた須川信行の歌を記した掛軸が4点ある。これらは各季節を詠んだものであり、春には『湖上春望』(ngc-016)、夏には『朝郭公』、秋には『深夜月』(ngc-043)、冬には『雪中友』をオクや離れ座敷の東側の床の間に掛けることが多い。



図2 屏風祭の来場者に自分たちで掛けた『祇園会弦召図』について解説する学生

夏でも祇園祭の期間中には、羽田月洲による『祇園会弦召図』をオクの床の間に飛び魚の置物と共に飾る慣例を現在も継承している。また、祇園祭の山鉾町界限では、宵山の期間に合わせて、各家の秘蔵の屏風をヒオウギと共にしつらえ、ミセやゲンカンを飾り立てる慣習がある。これ故、祇園祭は屏風祭とも呼ばれる。地元出身の日本画家で、鈴木松年に教えを受けた上村松園は、「この屏風祭は他のどの祭よりも愉しかった⁴⁾と回想しており、各家を写生して回ったという。

現在も長江家住宅では、屏風祭と称した宵山3日間の特別公開を行っている。ミセの間には六曲一隻の屏風、ゲンカンの正面には六曲一双の大屏風を展示している。例えば、2022年には、「旅・風景」というテーマで、ミセに川北霞峰の『和歌の浦』(ngec3-10)とゲンカンに谷口靄山の「春夏秋冬山水図」(ngec3-09)を展示したり、2023年には「植物」というテーマで、ミセに前述の『嵐山之図』、ゲンカンに作者不明の『四君子押絵張り』を展示したりして、出す屏風を毎年変えている。

屏風祭の主催は、所有する建物を公開するフージャースであるが、資料の所有者であるアート・リサーチセンターも企画に協力している。また、文学部の京都学専攻(2022年より京都学クロスメジャー)の学生をインターンシップ型授業として受け入れており、その受講生は、

展示物の選定・調査、キャプション作成、展示作業、当日の解説などに参加し、貴重な経験を積んでいる(図2)。

以上のように、長江家旧蔵品は京町家での暮らし方を継承していくために、欠かせない要素となっており、元の所有者を離れた後も現生きている資料といえる。そして、長江家住宅には、単に建物を保存する以上の文化的価値を与えている。また、大学での教材としても大いに活用されており、今後の研究の進展や新たな活用の広がりを期待する。

[注]

- 1) 高木良枝・高橋彰・佐藤弘隆(2017)「大規模京町家の現状と民間継承後の運営に関する研究」, 都市住宅学 2017 (99), 123-127.
- 2) 佐藤弘隆・高木良枝(2017)「京町家の所蔵品データベースと行事の継承 : 京都市有形文化財長江家住宅を事例に」, 都民俗建築 (151), 9-17.
- 3) 山田祐道(2002)『京都画壇の一隅一父・山田耕雲とその周辺一』, 北斗書房。
- 4) 上村松園(1979)『青眉抄』, 講談社。